

A large red flag with a white border on the left side. At the top left corner of the red area, there is a small red icon of a torch or a flame. The text is printed in black on the red background.

中国の社会主義

文化大革命

(第四集)

北京 外文出版社

中国の社会主義文化大革命

(第四集)

外文出版社

北京

目次

プロレタリア文化大革命万歳……………『紅旗』社説（一九六六年第八号）…5

ブルジョアジーの占拠する歴史学の陣地を奪取しよう……………『人民日報』社説（一九六六年六月三日）…25

ブルジョアジーの「自由、平等、博愛」のペールをはぎとろう……………『人民日報』社説（一九六六年六月四日）…31

毛沢東思想の新たな勝利……………『人民日報』社説（一九六六年六月四日）…47

プロレタリア革命派となるか……………『人民日報』社説（一九六六年六月五日）…51

プロレタリア文化大革命万歳

『紅旗』社説

(一九六六年第八号)

毛主席と党中央の直接指導する史上空前の大衆的なプロレタリア文化大革命が、いま、すさまじい勢いで、急速にくりひろげられている。それは、天地をくつがえすばかりの、なにももはばみえない勢いである。

広はんな労働者・農民・兵士、広はんな革命的幹部、広はんな革命的知識人は、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげて、いま、党内にもぐりこんだブルジョアジーの代表者を一掃し、すべての妖怪変化のたぐいを一掃し、すべての腐敗したブルジョア・イデオロギーと封建的イデオロギーを一掃しつつある。政治戦線と思想・文化戦線には、かつてみないすばらしい情勢があらわれているのである。

これは、上部構造のなか、イデオロギーの分野で「プロレタリア思想をおこし、ブルジョア思想をほろぼす」きわめて先鋭かつ複雑な階級闘争である。これは、ブルジョアジーの復活とプロレタリアートの反復活という食うか食われるかの闘争である。(この闘争は、わが国のプロレタリアート独裁と社会主義の経済的土台が強化、発展しうるかどうかにかかわり、われわれの党と国家が変色するかどうかにかかわり、われわれの党と国家の運命および前途にかかわり、また、世界革命の運命および前途にかかわるものである。)この闘争を、かりそめにもな

おざりにしてはならない。

なぜプロレタリア文化革命をおこなわなければならないのか。なぜプロレタリア文化革命がこれほど重要なのか。

毛沢東同志は、国際的なプロレタリアート独裁の歴史的経験を科学的に総括して、社会主義社会の矛盾、階級および階級闘争の学説を提起した。毛沢東同志は、つねにわれわれをいましめて、絶対に階級闘争を忘れてはならず、絶対に政治の先行を忘れてはならず、絶対にプロレタリアート独裁の強化を忘れてはならぬ、かならずさまざまな措置をとって、修正主義による指導権のつとりをふせぎ、資本主義の復活をふせがなければならない、とのべている。毛沢東同志は、政権をくつがえすには、まず上部構造をつかみ、まずイデオロギーをつかんで、世論を準備しなければならぬ、革命的な階級もそのとおりであり、反革命的な階級もそのとおりである、と指摘している。毛沢東同志は、ほかでもなくこの基本的観点から出発して、イデオロギーの分野で「プロレタリア思想をおこし、ブルジョア思想をほろぼす」階級闘争をくりひろげよ、とわれわれに呼びかけているのである。

これは、偉大な真理であり、マルクス・レーニン主義の偉大な発展である。

歴史上、ブルジョアジーが封建地主階級の手から権力を奪いとったとき、かれらはまずイデオロギーをつかみ、まず世論を準備した。ヨーロッパのブルジョアジーは、「文芸復興」いらい、たえず封建的イデオロギーを批判し、ブルジョア・イデオロギーを宣伝した。ヨーロッパ諸国のブルジョアジーは、いく世紀も世論を準備したのち、はじめて、十七、十八世紀にあいついで権力をうばいとり、ブルジョアジーの独裁をうち立てたのである。

百年あまりまえ、マルクスとエンゲルスが共産主義の学説の宣伝をはじめたのも、プロレタリアートの権力奪取のために世論を準備したのであった。ロシアのプロレタリア革命も、数十年にわたって世論を準備したのち、はじめて権力を奪いとったのであった。われわれ自身の直接の経験は、なおさら記憶に新しい。(中国のプロレタリアートは、政治の舞台に登場したばかりのころ、力が弱く、身に寸鉄もおびていなかった。では、革命をやるために、どこから手をつけるべきであつただろうか。やはり、マルクス・レーニン主義を宣伝し、帝国主義とそとの中国における手先を暴露したのである。中国のプロレタリアートが権力を奪取した闘争も、**五・四運動**の文化革命からはじまったのである。

中国のプロレタリアートが権力を奪取した歴史は、根本的にいって、毛沢東思想が労働者・農民・兵士大衆をつかんだ歴史である。大衆は適切にも、「毛沢東思想がなければ、新中国はない」といっている。偉大な革命の旗手毛沢東同志は、マルクス・レーニン主義を中国革命の実践と結びつけ、中国革命の様相を一変させた。歴史的経験がわれわれに教えているように、毛沢東思想があつたからこそ、大衆の擁護を日ましにかちとることができ、軍隊をもち、銃をもつことができ、革命根拠地をつぎつぎに樹立し、権力をつぎつぎに奪取して、ついには全国の権力を奪取することができたのである。

プロレタリアートは、権力を手にいれると、支配する階級となり、地主階級とブルジョアジーが支配される階級となる。だが、地主階級と反動的なブルジョアジーは、あまんじて支配されるものでは絶対になし、あまんじて滅亡するものでも絶対がない。かれらは、ふたたび勤労人民の頭上にまたがるうとして、つねにプロレタリアート独裁の転覆による復活を夢みるものである。かれらには、まだ強大な力があり、カネがあり、広はん社

会的つながりと国際的つながりがあり、反革命の経験がある。とりわけ、搾取階級のイデオロギーはまだ大きな市場をもっている。革命の隊列のなかでも、一部の動揺分子は、搾取階級の思想にむしろ生まれ、ついには反革命になりさがるだろう。そのうえ、小ブルジョアジーの自然発生的な力もたえず資本主義を生み出す。プロレタリアートは、権力を奪いとつたあとも、まだ権力を失う危険があるし、社会主義制度が樹立されたあとも、資本主義の復活する危険がある。もし、この点に大きな注意を払わず、必要な措置をとらなければ、われわれの党と国家は変色し、いく百万いく千万の人びとが命をうしなうこととなる。

生産手段の所有制の面で社会主義的改造が実現したあと、うち倒された地主階級とブルジョアジーのもつとも重要な陣地は、ブルジョアジーと封建主義のイデオロギーである。かれらの復活活動は、なによりもまずイデオロギーをつかみ、あらゆる手を打ってかれらの一連の腐敗した思想で大衆をあざむくことである。イデオロギーをつかみ、世論をつくり出すこと——これが、ブルジョアジーのプロレタリアート独裁をくつがえす準備である。ひとたび時機が熟せば、かれらは、あれこれの方式を使ってクーデターをおこし、権力を奪いとるであらう。

ソ連は、社会主義の生産関係をうち立てたあと、プロレタリア文化革命を真剣にはおこなわなかった。そのため、ブルジョア・イデオロギーが日ましにはん溢して、人びとの頭脳をむしろ、人びとに容易には気づかせないやり方で社会主義の生産関係を切りくずしていった。スターリンの死後、フルシチョフ修正主義グループはいっそうだればばかることなく反革命の世論をつくり出し、やがて、プロレタリアート独裁をくつがえす「宮廷」クーデターをおこして、党と軍隊と政府の権力を乗っ取ってしまった。

一九五六年のハンガリーの反革命事件でも、反革命分子はまず世論を準備し、そのあと、街頭はくり出して騒ぎをおこし、暴動をおこした。この反革命事件は、帝国主義が策動して、ペトフィ・クラブの一群の反共知識人をおこしたものであった。当時、まだ共産党員の看板をかけていたナジは、「王服をまとい」、反革命の頭目になった。

国際的なプロレタリアート独裁の歴史的経験がわれわれに教えているように、プロレタリア文化革命をおこなわず、ブルジョア・イデオロギーをだんこ消滅しなければ、プロレタリアート独裁をうちかためることはできず、社会主義制度をうちかためることはできない。ブルジョア思想が自由にはん溢すれば、プロレタリアート独裁がくつがえされるのは必至であり、ブルシチョフのようなブルジョアジーの代表者があらわれ、「宮廷」クーデターの形態または武力クーデターの形態、あるいはこの二つをむすびつけた形態をとって、権力を乗っ取るのは必至である。プロレタリアート独裁をうちかたため、プロレタリアート独裁の国家を社会主義、共産主義の方向へ発展させるには、かならずプロレタリア文化革命をおこなって、プロレタリア・イデオロギーをおこし、ブルジョア・イデオロギーをほろぼし、修正主義の思想をすっかり根こそぎにし、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想をしっかりと根づかせなければならない。

社会主義革命と社会主義建設をすすめるには、多方面の仕事に努力をほらなければならず、これらの仕事には、一本の赤い糸がづらぬいていなければならない。この赤い糸とは、プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争のことであり、社会主義と資本主義の二つの道の闘争のことであり、プロレタリアートとブルジョアジーの、イデオロギーの分野における階級闘争のことである。

毛沢東同志はわれわれにつきのよように教えている。

自、
 時といま → 条件本は...
 ...
 ...

「プロレタリアートとブルジョアジーとの階級闘争、各派の政治勢力のあいだの階級闘争、またプロレタリアートとブルジョアジーとのイデオロギー面での階級闘争は、やはり長期にわたる、曲りくねったたかいであり、ときには非常にげしくなることさえある。プロレタリアートは自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとし、ブルジョアジーも自分の世界観にもとづいて世界を改造しようとする。この面では、どちらが勝ち、どちらが負けるかの問題は、社会主義と資本主義とのあいだでまだほんとうには解決されていない」（『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』）。

プロレタリア文化革命は、イデオロギーの分野でプロレタリアートとブルジョアジーの「どちらが勝ち、どちらが負けるか」という問題を解決するためのものである。これは、すべての仕事をつらぬく、長期の、なみなみならぬ歴史的任務である。

一部の同志は、新聞や雑誌のうえでのプロレタリアートと反動的ブルジョアジーとの論争を、文化人の「ペン」の争いで、とるにたらぬことだ」と考えている。一部の同志は、業務に没頭して、思想・文化戦線の闘争に関心をよせず、イデオロギーの分野の階級闘争に注意を払っていない。これは完全に誤っており、きわめて危険である。もしブルジョアジーのイデオロギーを自由にはん濫するままにまかせておくと、その結果は、プロレタリアートの独裁がブルジョアジーの独裁に変わり、社会主義制度が資本主義制度または半植民地・半封建的制度に変わる事となる。これらの同志にたいしては、大喝一声、同志よ、敵は刀をときずまして、われわれの首をはね、われわれの権力を倒そうとしているのだ、きみたちはなぜ見たり聞いたりしていながら、これに注意をばらわれないのか、と言ってやらなければならない。

権力を奪いとるには鉄砲とペンにたよらなければならないが、権力をうちかためるにもこの二つのものにたよらなければならない。革命事業を守り、発展させるには、われわれの鉄砲をしっかりと握りしめなければならないばかりでなく、さらにプロレタリアートのペンをとって、ブルジョアジーのペンを一掃しなければならない。ブルジョアジーのイデオロギーをのこらず一掃してこそ、プロレタリアートの権力をうちかためることができ、プロレタリアートの鉄砲を一層しっかりと握ることができるのである。

思想・文化戦線の階級闘争をみると、そこにはまことに人びとを驚愕させるものがある。

建国いろいろ、思想・文化戦線におけるプロレタリアートとブルジョアジーの闘争、マルクス主義と反マルクス主義の闘争は、一度も絶えたことがない。社会主義の生産関係がうち立てられたあと、こうしたイデオロギーの分野における階級闘争は、いよいよ深まり、いよいよ複雑になり、いよいよはげしくなった。

一九五七年、ブルジョア右派は党と社会主義にたいして気がいじみた攻撃をくわえてきた。この攻撃では、章伯鈞—羅隆基同盟の反動政客のグループが公然と登場するまえから、ブルジョア右派の知識人がおびただし、毒草をまきちらし、一群の反革命の観点、反革命の政綱、反革命の映画、小説がぞくぞくとオリからとび出していた。これらは、あきらかに、ブルジョア右派が権力奪取のため世論を準備するためのものであった。

中国人民は、党中央と毛主席のすぐれた指導のもとで、ブルジョア右派の気がいじみた攻撃をしりぞけ、政治戦線と思想戦線できわめて大きな勝利をかちとった。

一九五八年、中国人民は社会主義建設の総路線の偉大な赤旗のもとに、大いに奮い立ち、大いに意気込み、各戦線で大躍進をくりひろげ、さかんに人民公社をつくった。同時に、労働者、農民、兵士大衆は熱情をこめて毛

主席の著作を實際とむすびつけて学び、運用した。思想・文化戦線でも革命がはじまった。

一九五九年から一九六二年にかけて、ソ連修正主義者の破壊と三年連続のひどい自然災害のために、わが国は一時のな経済的困難にみまわれた。だが、困難は革命的な中国人民をおどしあげることができなかった。中国人民は党中央と毛主席のすぐれた指導のもとで、わき目もふらずにけんめいに働き、奮起して国の富強をはかった。数年の後には、困難が克服され、すばらしい情勢があらわれた。だが、経済的困難にみまわれた数年間に、妖怪変化がぞくぞくとオリからとび出し、党と社会主義にないする反動的ブルジョアジーの攻撃は狂気の絶頂にたつた。

哲学界では、楊献珍が、意識と存在の同一性を否定するまちがった理論をほいままに宣伝して、労働者・農民・兵士大衆の主体的能動性に打撃をあたえ、大躍進に反対した。ついで、楊献珍はまた、「合二而一」論をまきちらして、「三和一少」「三自一包」(注)のきわめて反動的な政治路線に哲学的な「根拠」をあたえた。党内にもぐりこんだ、ブルジョアジーを代表するいわゆる「權威」者は、「俗流化」「單純化」「實用主義」という三本のこん棒を気ちがいのようにふりまわして、労働者、農民、兵士が毛主席の著作を實際とむすびつけて学び、運用することに反対した。かれらはまた、職権を利用して、新聞・雑誌が労働者、農民、兵士の哲学論文をのせることを禁止した。同時に、一部のブルジョア「専門家」は、哲学史の研究に名をかりて「自由、平等、博愛」をさかんに宣伝し、孔子をさかんにもちあげ、孔子というミイラをかりて、かれらの体系だったブルジョアの観点を宣伝した。

経済学界では、孫冶方^{スニエフアン}らが体系だった修正主義のまちがった理論をうち出した。かれらは、毛沢東思想による

統率、政治による統率に反対し、利潤による統率、札束による統率を主張した。かれらは、社会主義の生産関係を变え、社会主義企業を資本主義企業に変えようとたくらんだ。

史学界では、ブルジョアジーの一群の「權威者」が、一九五八年からはじまった史学革命にほいままな攻撃をくわえた。かれらは、史学の研究をマルクス・レーニン主義、毛沢東思想によつて統率することに反対し、史料がすべてであると宣伝した。かれらは、いわゆる「歴史主義」によつて、マルクス・レーニン主義の階級闘争の学説に反対した。かれらは、革命的な史学関係者が帝王将相を批判し、農民と農民戦争を前面におし出すことにたいして、ひじょうな敵意をいだいた。かれらは、帝王将相を口をきわめてはめちぎり、農民と農民戦争をほいままに中傷した。かれらは史学界におけるブルジョア「王党派」である。そのうち、一部のものは反共のペテランである。呉晗^{ウハン}、翦伯贊^{シェンボザン}がそうした人物である。

文学・芸術界では、ブルジョアジーの代表者が、毛主席の文学・芸術路線に対抗する、体系だった修正主義的文学・芸術路線を極力宣伝し、かれらのいわゆる三十年代の伝統をけんめいに宣伝した。「眞実描写」論、「リアルイズム大道」論、「リアルイズム深化」論、「題材決定」反対論、「中間人物」論、「硝煙臭」反対論、「時代精神合流」論、「離経背道」論などは、かれらの代表的な論点である。これらの論点に「みちびかれて」、反党・反社会主義の一群の悪質な劇、悪質な映画、悪質な小説、悪質な映画史、悪質な文学史があらわれた。

教育界では、ブルジョアジーの代表者が、教育をうける者を徳育、知育、体育のいくつかの方面で成長させ、社会主義の自覚をもつ、教育のある勤労者に育てあげるといふ、毛主席のうち出した教育方針に極力反対し、半労半学^{ハムラウハムガク}の教育制度に極力反対し、ソ連修正主義の一連の教育「理論」と制度を宣伝した。かれらは、若い世代を

ブルジョアジーの後継者に育てあげようとして、必死になってわれわれとのあいだに若い世代を奪いあった。報道界では、ブルジョアジーの代表者が、報道には指導性がなければならないことに極力反対し、ブルジョアジーのいわゆる「知識性」を提唱した。かれらは、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想による報道事業の指導を圧殺し、ブルジョアジーの商品を自由にはならんさせ、われわれの報道の陣地を奪いとうとたくらんだ。この逆流のなかで、もつとも反動的で、もつとも気がいじみていたのは、「三家村」反党グループであった。かれらの陣地はひじょうに多くて、新聞もあれば、雑誌もあり、講壇もあれば、出版機構もあった。かれらの手はとくに長くて、文化領域の各方面にのび、一部の指導権を乗っ取っていた。かれらの反動的な政治的臭気はもつともするどくて、かれらの作品は反動的な政治的臭気にもつともはやく呼応した。かれらは、指揮もあれば、組織もあり、計画もあれば、目的もあつて、資本主義の復活とプロレタリアート独裁の転覆のために世論を準備したのである。

この逆流のなかでは、党内にもぐりこんだブルジョアジーの代表者がおもな役割をはたした。かれらは、「赤旗」をおし立てて赤旗に反対し、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想のペールをまもつてマルクス・レーニン主義、毛沢東思想に反対した。かれらは、自分をマルクス主義の「権威者」のようにみせかけ、党の政策を解説する「権威者」のようにみせかけ、ほしいままに毒をまきちらして、大衆をあざむいた。かれらは職権を利用して、一方ではおびただしい妖怪変化をオリからとび出させるとともに、他方ではプロレタリア左派の反撃をおさえつけた。それは、共産主義という羊頭をかかげて、反党・反社会主義の狗肉を売るひとにぎりの陰謀家である。それはもつとも危険な手合いである。

一九五九年いろいろのブルジョアジーの攻撃にたいして、われわれはたえず反撃をくわえてきた。とくに昨年十一月、姚文元同志が「新作歴史劇海瑞の免官」を評すを発表してから、われわれはプロレタリア文化大革命の進軍ラッパを吹きながら、ブルジョアジーの攻撃にたいする大衆的な反撃戦をくりひろげてきた。

この反撃戦で、広はんな労働者・農民・兵士、広はんな革命的幹部、広はんな革命的知識人の自覚はかつてなく高まり、その戦闘力は大いに強まった。大衆のくりひろげた戦闘によって、反党グループへ三家村は粉砕され、反党グループへ三家村の根はとりのぞかれた。この根は前北京市委員会にはかならない。前北京市委員会の指導には反党・反社会主義の黒い糸がたらぬかれていた。前北京市委員会の一部の主要な責任者は、マルクス・レーニン主義者ではなくて、修正主義者であつた。かれらは、多くの陣地と道具を一手ににぎつて、プロレタリアートにたいする独裁をおこなつてきた。かれらは野心家、陰謀家の集団であつた。かれらの陰謀はあばかれ、かれらは失敗した。わが党中央は、北京市委員会を改組し、新しい市委員会を樹立した。これはひじょうにすぐれた、ひじょうに正しい決定である。これは毛沢東思想の新たな勝利である。

昨年、われわれが大規模な反撃戦を展開していろいろ、それまで党内にもぐりこんで、「赤旗」をおし立てて赤旗に反対してきたブルジョアジーの代表者は、足なみがすっかり乱れてしまった。かれらは、あわてふためいて五つの「宝器」をかつぎだし、ブルジョア右派をあと押しし、かばうとともに、プロレタリア左派を制圧し、これに打撃をくわえた。

ひとつの「宝器」は、「意見をだす」というものである。

党内にもぐりこんで、「赤旗」をおし立てて赤旗に反対したブルジョアジーの代表者は、意見をだすという党

の方針を極力ねじまげ、意見をだすということの階級的内容を骨抜きにし、意見をだす方針をブルジョアジーの自由化にねじまげてしまった。かれらは、ブルジョア右派には「意見をはく」のを許すが、プロレタリア左派には争いを許さず、ブルジョア右派には攻撃することを許すが、プロレタリア左派には反撃することを許さなかつた。かれらは、右派には大いに意見をださせ、さかんに意見をださせながら、左派の反撃の原稿は、これを握りつぶしてしまうか、投稿者にかれらの意図どおりむりに書きあらためさせた。かれらは、政治の面から海瑞の免官を批判してはならない、さもなければ、意見をだすのをさまたげ、みんな話ができなくなる、と言った。われわれは、これらのだんな方にたずねたい。おまえたちは、まだ「意見をだす」のが少ないとでもいうのだろうか。おまえたちは、剣をぬき矢をつがえて、政治の面から党を攻撃したのではないか。なぜプロレタリアートが意見をだすことを許さず、プロレタリアートがブルジョア右派に政治の面から反撃することを許さないのか。もともと、おまえたちの「意見をだす」とは、ブルジョアジーに青信号を出して、一律にその通行を許し、プロレタリアートには赤信号を出して、その通行を禁ずることにほがならなかつたのである。

もうひとつの「宝器」は、「先にうち立ててから、後にうち破る」というものである。

党内にもぐりこんで、「赤旗」をおし立てて赤旗に反対したブルジョアジーの代表者は、ブルジョアジーの攻撃にプロレタリアートが反撃したとき、さも「弁証法」の大家のようなふりをして、「先にうち立ててから、後にうち破る」ということを大声でわめきたてた。かれらは、「先にうち立ててから、後にうち破る」ということを口実にして、プロレタリアートにブルジョア・イデオロギーをうち破ることを許さず、ブルジョアジーの反動的な政治のとりでを攻めるのを許さなかつた。だが、「先にうち立ててから、後にうち破る」というのは、弁証

法にそむき、毛沢東思想にそむくやり方である。毛沢東同志は、つねづね、うち破らなければうち立てられない、とわれわれに教えている。われわれは、まずもってうち破らなければならない。うち破ることは、革命をおこなうことであり、批判することである。うち破るためには道理を説かなければならず、その過程でうち立てられるのである。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想は、すべて、ブルジョア・イデオロギーをうち破る闘争、右翼日和見主義と「左」翼日和見主義をうち破る闘争のなかで発展してきたものである。先にうち破ってから後にうち立て、うち破る過程でうち立てるといふこと——これこそ歴史の弁証法である。マルクス・レーニン主義、毛沢東思想は、天地が始まっていらいもつとも偉大な真理である。これがうち立てることとてなんであろうか。われわれはブルジョアジーのだんな方にたずねたい。おまえたちはなにをうち立てようとするのか。おまえたちがブルジョア反動思想の樹立だけを許し、プロレタリア革命思想の樹立を許さないのは、きわめて明らかである。プロレタリアートがマルクス・レーニン主義、毛沢東思想によつて、すさまじい勢いでブルジョアジーの攻撃をしりぞげ、ブルジョア・イデオロギーを大いにうち破っていたとき、おまえたちが「先にうち立ててから、後にうち破る」ということをさかんにわめきたてたのは、右派をかばい、左派の反撃を許さないためであり、プロレタリア文化革命に反対するためであつた。

もうひとつの「宝器」は、「左派の学閥」に反対し、これを防止するというものである。

党内にもぐりこんで、「赤旗」をおし立てて赤旗に反対したブルジョアジーの代表者は、プロレタリア左派がブルジョアジーの攻撃をしりぞげるたびに、「きめこまかに」とか「深くはいる」とかといったさまざまな口実をあげて、左派は「乱暴」だとか「棍棒」だとか、さかんにののしつてきた。ブルジョアジーの攻撃にたいする

今回の大反撃にさいしても、かれらは、「左派の学閥」に反対し、これを防止するという「宝器」をかきだして、プロレタリア左派を身うごきもできぬように押えつけてしまおうとした。だが、そんなことはできるものではない。われわれに言わせると、「学閥」というこのレッテルは、おまえたちブルジョアジーの代表者にはりつけてこそ、びったりするのであり、ブルジョアジーのいわゆる「学術の権威者」にはりつけてこそ、びったりするのである。党内にもぐりこんで、ブルジョアジーの学閥をかばい、あと押ししてきたおまえたちだんな方こそ、新聞も見なければ、本も読まず、大衆から浮きあがって、なんの知識もない、権勢をかきかきしている大きな党閥、大きな学閥なのである。プロレタリア左派は、一貫してマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の眞理を堅持し、科学的な論証によってブルジョア思想を批判してきた。プロレタリア左派は、「学閥」とは縁もゆかりもない。ブルジョアジーの「学閥」、おまえたちひとにぎりの大きな党閥、大きな学閥にたいし、われわれはどうしても大がかりな討伐をおこなうであろう。左派を「棍棒」とのしるだんな方に言っておく。左派はプロレタリアートの鋼鉄の棒であり、黄金の棒である。われわれはどうしてもこの棒で旧世界をこっぴみじんに打ちくだき、おまえたちひとにぎりの大きな党閥、大きな学閥を打ち倒し、おまえたちの閻魔王宮をぶちこわすであろう。これがプロレタリアートの独裁なのである。

もうひとつの「宝器」は、「純学術的な討論」というものである。

党内にもぐりこんで、「赤旗」をおし立てて赤旗に反対したブルジョアジーの代表者は、イデオロギーの分野の階級闘争をいわゆる「純学術的な討論」といにくるめて、一方では党と社会主義にたいするブルジョア右派の攻撃をおおいかくし、他方ではプロレタリア左派の反撃をおさえてきた。われわれはこれらのだんな方にたずね

たい。呉晗の書いた金海瑞、皇帝をのしる^{トレストリ}や金海瑞の免官^{リヤオクシヤン}、鄧拓、廖沫沙らのならべたてた反党・反社会主義の黒い言葉——これらに果たして学術などというものがあるだろうか。「純学術的な討論」とは、ブルジョアジーがつねづね宣伝しているだまし文句である。階級社会に、「純粹の学術」などというものはない。すべての学術は、一定の階級の世界観の基礎のうえにうちたてられている。すべての学術は、政治に従属するものであり、なんらかの方法で一定の階級の政治と経済に奉仕するものである。こんどのわれわれの大反撃戦で、ブルジョアジーの代表者が「純学術的な討論」という「宝器」をかきだして、政治先行に反対したのは、「三家村」とか「四家村」といった反党的な殺人宿の政治的急所をおおいかくすためであり、ブルジョアジーの政治を先行させて、プロレタリアートの政治を先行させることに反対するためであり、また、この大闘争の方向を右旋回させて、修正主義の軌道にのせるためであった。

もうひとつの重要な「宝器」は、「眞理のまえではだれも平等だ」とか、「誤った言論はだれにも関係がある」とか「いりみだれた戦いだ」とかというものである。

プロレタリアートのブルジョアジーにたいするこの反撃戦で、党内にもぐりこんで、「赤旗」をおし立てて赤旗に反対したブルジョアジーの代表者は、この「宝器」をかきだして、一方では、かれらの腹心にあくまで食いとめ、しっかりと陣地を守って一歩もしりぞいてはならないと要求し、他方では混乱をつくり出して、火事場どろぼうをきめこみ、反攻の機会をうかがおうとしたのである。

「眞理の前ではだれも平等だ」——これは徹底したブルジョアジーのスローガンであり、このスローガンはまったく欺まんのものである。互いに対立している階級の間には、平等などというものは、なにひとつ存在して

いない。真理は階級性のあるものである。現代においては、プロレタリアートだけが客観的真理を把握することができる。なぜなら、プロレタリアートの階級的利益は客観的法則と完全に一致しているからである。反動的な、腐敗したブルジョアジーは早くから真理と手を切っており、かれらのいわゆる「真理」は、時代の流れに逆らい、客観的法則に反する曲論にすぎない。プロレタリアートとブルジョアジーの間、プロレタリア・イデオロギーとブルジョア・イデオロギーの間、プロレタリアートの真理とブルジョアジーの曲論の間は、もし西風が東風を圧倒するのでなければ、東風が西風を圧倒するのであって、平等などというものは絶対にありえない。プロレタリアートがブルジョアジーと闘争すること、プロレタリアートがブルジョアジーにたいして独裁をおこなうこと、プロレタリアートがさまざま文化領域を含む上部構造で独裁をおこなうこと、また、共産党内にもぐりこみ「赤旗」をおし立てて赤旗に反対するブルジョアジーの代表者を、プロレタリアートがひきつづき一掃することなど——これらの基本的な問題で平等などというものを許すことができるだろうか。数十年らしいの古い社会民主主義政党と、十数年らしいの現代修正主義は、これまで一度もプロレタリアートにブルジョアジーとの平等などというものを許したことはなかった。党内にもぐりこんだブルジョアジーの代表者が「真理の前ではだれも平等だ」というスローガンをもち出してきたのは、反党・反社会主義分子を支持し、左派の反撃をおさえつけるためである。われわれはこれらのだんな方にたずねたい。おまえたちはなにかといえれば平等を口にしてはいるではないか。それなのに、なぜ左派の原稿をにぎりつぶしたまま発表せず、右派がさかんに毒草をまきちらすことだけを許したのか。ここに平等などというものがあるだろうか。おまえたちに卒直にいつておく。われわれは、おまえたちのプロレタリアートとの平等などというものを絶対に許さない。われわれのおまえたちとの闘争は食うか食われ

るかの闘争であつて、おまえたち反党・反社会主義の悪党一味にたいしては、独裁を實行する以外にない、と。いわゆる「誤った言論はだれにも関係がある」とか、いわゆる「いりみだれて戦」おうとか、というのは大陰謀である。われわれは、なによりもまず階級の境界線をはっきりと区別し、革命と反革命の境界線をはっきりと区別しなければならぬ、という。革命的左派も、客観的事物を認識する過程で、あれこれの誤りを犯すかもしれないが、これはブルジョア右派の反党・反社会主義・反革命の言動と根本的に違ったものであつて、混同することは絶対に許されない。今回の文化大革命における主要な矛盾は、広はんな労働者・農民・兵士大衆、広はんな革命的幹部、広はんな革命的知識人とおまえたちひと握りの反党・反社会主義のブルジョアジーの代表者との敵対的矛盾である。これは革命と反革命との矛盾であり、和解できない敵味方の矛盾である。おまえたちのあらゆる反革命の言動にたいしては、われわれはかならずきびしい批判を加え、戦鼓を鳴らしてこれを攻めるであらう。一般のブルジョア學術思想にたいしても、もちろん批判しなければならぬが、しかし、これはおまえたちのような反党・反社会主義分子に対処するのと区別がある。われわれは、一般のブルジョア學者にたいしては、かれらが反共、反人民でないかぎり、かれらに適当な仕事の条件をあたえ、かれらが仕事のなかでたえず自分の世界観を改造するようにさせる。党内にもぐりこんだブルジョアジーの代表者は、われわれがブルジョアジーの攻撃をしりぞけているとき、「誤った言論はだれにも関係がある」とか「いりみだれた戦い」とか大声でわめき立てているが、そのねらいは、左派を引きずり出して放さず、水をにごらせ、混乱をつくり出して、反攻と報復に出ようとするにほかならない。これはむだ骨折りというものである。われわれは毛主席の指示にもとづいて、左派、中間派、右派を区別し、左派に依拠し、右派に打撃をあたえ、大多数を獲得し、団結させ、教育し

て、プロレタリア文化大革命を最後までやりぬかなければならぬのである。

党内にもぐりこんで、「赤旗」をおし立てて赤旗に反対するブルジョアジーの代表者のこれらの「宝器」は、これを一点に集約するならば、かれらがプロレタリアートにたいして独裁をおこなおうとすることにほかならない。かれらは文化領域の各方面で、すでに一部の指導権を乗っとり、われわれにたいして独裁をおこなっている。われわれはかならずこれらの陣地を残らず奪いかえし、これらのブルジョアジーの代表者をすべて打ち倒さなければならぬ。

「赤旗」をおし立てて赤旗に反対する——これが党内にもぐりこんだブルジョアジーの代表者の最大の特徴である。

どのようにしてかれらを見分けるか。その唯一の方法は「毛主席の著作を読み、毛主席のことを聞き、毛主席の指示どおりに事を運ぶ」ことである。

毛沢東思想は現代のマルクス・レーニン主義の最高峰であり、現代のもっとも高貴な、もっとも生きたマルクス・レーニン主義である。毛沢東同志の理論と実践は、日月が宇宙をめぐり、河川が大地を流れるようなものである。毛沢東同志の著作は、われわれのすべての活動にたいする最高の指示である。毛沢東思想を擁護し、毛沢東思想にもとづいて事を運ぶか、それとも毛沢東思想を排斥し、毛沢東思想にもとづいて事を運ぶことに反対するか——これこそマルクス・レーニン主義と修正主義の分水れいであり、革命と反革命の分水れいである。

毛沢東思想に合致するものなら、われわれはすべて賛成し、擁護する。毛沢東思想に反対するものなら、その人間がどれほど高い地位にしようと、どれほど大きな「名声」や「権威」をもつていようと、われわれはなにも

恐れずかれらとたたかい、かれらを打ち倒す。

党内にもぐりこんだブルジョアジーの代表者は見たところ「とてつもなく大きなしろもの」のようだが、その実、かれらもすべての反動派と同様、みなハリコの虎にすぎない。

毛沢東思想は羅針盤であり、労働者、農民、兵士はプロレタリア文化革命の主力軍である。毛沢東思想という羅針盤があり、労働者、農民、兵士という主力軍があれば、どのような妖怪変化も打ち倒せるし、プロレタリア文化革命はかならずつきつきと勝利をおさめることができる。

われわれが反党グループ「三家村」を摘発し、批判しているとき、国内の地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子および外国の帝国主義者、修正主義者は他人の災をよろこび、ここからうまい汁がすえるものと思ひこんでいる。われわれは内外の反動派に、おまえたちはロバよりもつと愚かだと告げておく。反党グループ「三家村」を摘発し、批判し、あらゆる妖怪変化を一掃するのは、われわれの党と国家の内部にいる、おまえたちの代理人を打ち滅ぼし、おまえたちが希望をよせている「時限爆弾」をすつかり取り除くことにはかならない。プロレタリア文化大革命が深まるにともなう、われわれは全国人民のなかに毛沢東思想の根をいっそうしつかりとおろさせ、完全に修正主義の根を取り除き、資本主義復活の根を取り除くであろう。歴史は、一群の愚かなロバであるおまえたちを容赦なくあざ笑うであろう。

内外の反動派はまた、われわれがあらゆる知識人に打撃をあたえていると中傷している。これはデタラメである。わが国のプロレタリア文化大革命の闘争のはこ先は、共産主義という羊頭をかかげて、反共という狗肉を売る、ひと握りの悪党どもに向けられているのであり、反党・反社会主義・反革命のひと握りのブルジョア知識人

に向けられているのである。古い社会を経て来た広はん知識人にたいしては、われわれは団結・教育・改造という方針をとっている。文化大革命を通じて、プロレタリア知識人の隊列は日まじに強大となりつつある。すべての革命的な人びとよ、毛沢東思想を基礎として、いっそうかたく団結しよう！われわれは毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、プロレタリア文化大革命の偉大な赤旗を高くかかげ、勝利に乗じて前進しよう！

プロレタリア文化大革命万歳！

〔注〕「三和一少」とは、帝国主義、各国反動派、現代修正主義と「融和」し、各国人民の革命闘争への支援を少なくすること

「三自一包」とは、自留地を多くのこし、自由市場を多くもつけ、損益ともにみずから責任を負う企業を多くつくり、農業生産の任務を一身ごとに請け負わせること。

ブルジョアジーの占拠する歴史学の陣地を奪取しよう

『人民日報』社説

(一九六六年六月三日)

いま、プロレタリア文化大革命が、イデオロギーの各分野の反動のとりでに激しい衝撃をあたえており、史学界の反動のとりでにも激しい衝撃をあたえている。

ブルジョアジーの代表者は、歴史学をかれらの反党・反社会主義の重要な陣地にしている。かれらは歴史をねじまげ、むかしに事よせていまを風刺し、大衆をあざむき、資本主義復活のために世論作りをやってきた。しかし、広はんな労働兵大衆と革命的幹部および革命的知識人は、唯物史観というこの戦闘的な武器を運用して、歴史の本来の姿をあきらかにし、現実の階級的動向にメスを入れ、プロレタリアート独裁を守り、社会主義を守るために、反動的な歴史学の観点とはげしい闘争をおこなっている。

革命的な唯物史観すなわち史的唯物論と、反動的な唯心史観すなわち史的観念論とは、根本的に敵対するものである。史的唯物論は、人類の歴史を勤労人民の歴史とみなすが、史的観念論は、人類の歴史を帝王将相の歴史とみなす。史的唯物論は、革命はすべてを変革することができると考えるが、史的観念論は、帝王将相の恩恵が

すべてを決定すると考える。この二つの根本的に敵対する歴史観は、けっして平和的に共存することができない。

プロレタリア革命戦士は、史的唯物論で自分の頭脳を武装し、史的唯物論で世界を観察し、改造する。すべての反動派はみな、史的観念論者であり、かれらはつねに歴史の発展法則にそむいて、歴史の車輪を逆転させようと企てるものである。社会主義革命が深まるにつれて、史的観念論にしがみついている人たちは、不可避的に、つぎつぎと反党・反社会主義分子に墮落していくものである。これは人の意志によって左右されない客観的法則である。

一部の歴史学の陣地にとぐるをまいてブルジョアの「権威者」とこれらの「権威者」を支持するブルジョアの代表者は、まさにこのようにして、自分を人民に敵対する地位においている。これらの「権威者」のなかには、反党・反社会主義分子になってしまったものもあれば、反党・反社会主義の一手前まで墮落したものもある。

毛沢東同志は、「人民、ただ人民のみが世界の歴史を創造する原動力である」とのべている。

毛沢東同志はまた、「中国の封建社会では、このような農民の階級闘争、農民の蜂起、農民戦争だけが、歴史を發展させる真の原動力であった」とのべている。

毛沢東同志はさらにつぎのように概括している。「階級闘争で、一部の階級は勝利し、一部の階級は消滅する。これが歴史であり、これが数千年にわたる文明史である。この観点によって歴史を解釈することを史的唯物論といい、この観点の反対側になつのが史的観念論である」

史学界のブルジョアの「権威者」は、まさに毛沢東同志のこれらの科学的な論断に反対しているのである。かれらは数千年の文明史が階級闘争の歴史であることをかたくなに否定している。かれらはいわゆる「歴史主義」つまり唯心史観をもって、マルクス・レーニン主義の階級闘争の学説に反対し、これを書きかえている。かれらは、人民大衆が世界史を創造する原動力であるということをかたくなに否定し、勤労人民と農民戦争を気がすむまで中傷している。かれらは、反動的支配階級のいわゆる「護歩政策」こそ歴史發展の原動力であるとわめきつて、勤労人民と農民戦争の偉大な役割をすべて抹殺している。かれらがたたえるものは、人民の上ののしかかっていた帝王将相たちだけである。かれらは史学界における「王党派」なのである。

史学界のこれらの「王党派」は、自分たちが革命をやらなければならないだけでなく、他人にも革命をやらせない。革命的史学関係者は、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想を指針として、もう一度歴史全体を書きあらためなければならぬ。この偉大な歴史学上の革命は、史学界の「王党派」のこのうえもなく深いにくしみをかきたて、かれらに末期の到来を感じさせている。そこで、かれらは必死になつてこの革命に抵抗し、これを破壊しようとしているのである。

史学界のブルジョアの「権威者」たちが、マルクス・レーニン主義に反対し、毛沢東思想に反対するさまざまな活動をおこなっているのは、社会主義に反抗するブルジョアジーと地主階級の必要にこたえたものである。これらの「王党派」は、旧制度を守り、保守派を守り、旧思想を守っており、つまり、資本主義復活のための準備をととのえる思想的陣地を守っているのである。一部の人がとはまた、歴史上の死かばねを使って、偉大なプロレタリア政党、社会主義制度にたいして直接悪らつな攻撃を加えている。

史学界における両軍の対戦は、社会主義社会の階級闘争の法則によつて決定されるものである。

われわれのこの偉大な変革の新時代に、毛沢東同志はマルクス主義の唯物史観を、もつとも新しい、もつとも高い水準にひき上げた。毛沢東同志は社会主義社会の矛盾、階級および階級闘争の学説を系統的に、全面的にうちだし、社会主義社会発展の原動力について、つつこんだ説明をおこなつた。毛沢東同志は、社会主義社会が発展するには、プロレタリアートとブルジョアとの階級闘争をかなめとし、社会主義と資本主義との二つの道の闘争をかなめとしなければならぬと指摘している。

わが党と国家の活動の各分野ではみなそのとおりであり、歴史学の領域でも、もちろんそのとおりである。歴史学の領域に、はげしい階級闘争が充満していることは、無数の事実が証明している。歴史学というこの陣地は、プロレタリアートがちよつとでも手をゆるめるならば、すぐブルジョアに占領されてしまう。ここでは、唯物史観で歴史を解釈し、プロレタリアートの政治に奉仕し、社会主義革命に奉仕するか、それとも、唯心史観で歴史を解釈し、ブルジョア側の政治に奉仕し、資本主義の復活に奉仕するかのどちらかである。歴史学においても、その他の科学と同じく、唯物史観と唯心史観、プロレタリア思想とブルジョア思想の平和共存は絶対不可能である。両者の間には、だれがだれに勝つかの闘争、食うか食われるかの闘争しかありえない。

史学界におけるブルジョアの「権威者」たちは、口々に階級闘争を否定しているが、その実、かれらの反動的な謬論と活動は、プロレタリアートにたいする大胆不敵な階級闘争なのである。

毛沢東同志はつぎのようにのべている。「攪乱、失敗、ふたたび攪乱、ふたたび失敗、さいごに滅亡——これが人民の事業に対処する、帝国主義と世界のいつさいの反動派の論理で、かれらはけつしてこの論理に反するこ

とはない。これはマルクス主義の法則である」と。この法則は、国内の階級敵にたいしても、完全にあてはまるものである。地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子は、けつしてこの論理に反することはない。へ三家村などの悪党一味も、けつしてこの論理に反することはない。史学界のなかの反共的な知識人も、またけつしてこの論理に反することはない。

歴史学はイデオロギーの重要な陣地である。ここでは、いまプロレタリア思想をおこし、ブルジョア思想を滅ぼすはげしい階級闘争がおしすすめられている。プロレタリア文化大革命において、われわれはブルジョアの「権威者」が占拠している陣地を、ひとつひとつ奪回しなければならぬ。

いくつかの歴史学の陣地を占拠していたブルジョアの「権威者」は、一部の部門でプロレタリアートにたいして独裁を実行してきた。かれらは職権を利用して、さかんに毒草をまきちらし、プロレタリアート左派の反撃をおさえつけた。かれらは革命的な歴史学関係者に、さまざまの卑劣な手段をもちいて、打撃を加えた。かれらは悪徳商人のように資料を独占し、へ三家村の反党グループの急先鋒呉晗がすでにあばかれた後でさえ、呉晗に関係のある資料を隠して、この反共のベテランをかばつた。かれらはまったく史学界における「東の霸王」「西の霸王」である。

これらの「権威者」たちは、歴史学の領域をかれら独占の地盤としていた。他の人が論文を発表してかれらを批判しようものなら、かれらは公然と、それは「歴史にたいする侵略だ」とわめきたてた。われわれはこれらのどんな方に告げておく。おまえたちの反党・反社会主義の歴史学の陣地をわれわれは占領しなければならない。これはおまえたちに言わせれば「侵略」だが、われわれに言わせれば「権力の奪回」である。われわれは、

おまえたちにかすめとられたプロレタリアートの指導権をあらためて奪回し、おまえたちがブルジョアジーの独裁を實行している地盤の上に、あらためてプロレタリアート独裁をうちたてるのである。

このプロレタリア文化大革命のなかで、われわれはかならずブルジョアジーの反動的な歴史の陣地を徹底的に粉碎しなければならないし、資本主義の復活に奉仕する反革命的な観念論的史学体系を徹底的に粉碎しなければならない。広はんな労働兵大衆とプロレタリアートの文化革命の戦士的手中には、毛沢東同志の發展させた現代における最新かつ最高の戦闘的な史的唯物論があるので、かならず偉大なそして新勝利をかちとり、毛沢東思想の偉大な赤旗を歴史学の陣地にしっかりと立ち立てることができにちがいない。

ブルジョアジーの「自由、

平等、博愛」のベールをはぎとろう

『人民日報』社説

(一九六六年六月四日)

わが国は、いま、偉大なプロレタリア文化革命の高まりのなかにある。この高まりは、ブルジョアジーと封建残余勢力がいまなお握っている、すべての腐敗した思想の陣地と文化の陣地に力強い衝撃をあたえている。広はんな労働者・農民・兵士大衆、革命的幹部、革命的知識人は、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげて、ブルジョアジーの反党・反社会主義の黒い糸にたいし猛烈な反撃を展開している。これは、きびしい、鋭い、複雑な政治闘争であり、プロレタリアートとブルジョアジーとのたたかい、社会主義と資本主義とのたたかい、革命と反革命とのたたかい、マルクス・レーニン主義と修正主義とのたたかいであり、食うか食われるかの階級的格闘である。この闘争はけつして小さな事柄ではなく、わが党とわが国の運命、わが党とわが国の前途、わが党とわが国の将来の姿にかかわるもつとも大切な事柄であり、また世界革命にかかわるもつとも大切な事柄でもある。

毛主席はマルクス・レーニン主義の基本的原理とプロレタリアート独裁の歴史的経験にもとづいて、社会主義社会の階級と階級闘争を全面的、系統的に分析し、マルクス・レーニン主義のプロレタリアート独裁についての学説を創造的に発展させた。毛主席はわれわれに「つぎのように教えている。社会主義社会では、生産手段所有制の社会主義的改造がなしとげられたあとも、階級矛盾はやはり存在し、階級闘争はけつしてなくなるならない。社会主義の全段階をつうじて、プロレタリアートとブルジョアジーという二つの階級、社会主義と資本主義という二つの道の闘争が「つらぬいて」いる。社会主義建設を保証し、資本主義の復活を防止するためには、政治戦線、経済戦線、思想・文化戦線で社会主義革命を最後までやりぬかなければならない。毛主席の社会主義社会における階級と階級闘争についての理論、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁についての理論、所有制の面で社会主義革命をおこなわなければならないばかりでなく、イデオロギーの領域でも社会主義革命をおこなわなければならないことについての理論——これこそ、われわれがこの偉大な社会主義文化大革命のなかでかならず守らなければならない正しい路線であり、正しい指導方針なのである。

わが党にまぎれこんできたひとにぎりのブルジョアジーの代表者は、下心をもってこんどの闘争の階級の本質をおおいかくし、重大な政治闘争を「純学術的な問題」であるとか、「異なった意見の討論である」とかと言いくるめ、「自由、平等、博愛」というブルジョアジーの黒い旗をかかげて、毛主席をはじめとする党中央のプロレタリア文化革命の路線に対抗した。かれらは、「さまざまな異なった意見（マルクス・レーニン主義にそむくものも含めて）をみな十分に出させなければならない」と狂気のようにわめきたて、「真理のまえではだれも平等だ」とか、「学閥のように横暴であつてはならず、権勢をカサにきて人をおさえつけてはならない」とかとわ

めきたて、また「反党・反社会主義の妖怪変化」とのたたかいについては「慎重」のうえにも「慎重」でなければならず、「引きずり出して放さない」のはよくないなどとわめきたてた。かれらの腹ぐるい下心は、大衆をだまし、水をにごらせ、階級の戦線を混乱させ、闘争の目標をそらせることであつた。つまり、ブルジョア右派の志気をふるいたたせ、プロレタリア左派の威風をたたき落とし、ブルジョア右派をかばい、プロレタリア左派を打ちのめすことであつた。それはまた、ブルジョアの自由化をすすめて、修正主義を實行し、プロレタリアートの天下をかく乱して、時機がくれば、プロレタリアートの権力を奪いとり、資本主義の復活を實現しようとすることであつた。

ブルジョアジーの「権威者」であるだんながたよ。おまえたちは誤りをおかす専門家である。情勢にたいするおまえたちの判断は、まったくまちがっている。党の指導とプロレタリアート独裁の威力にたいするおまえたちの判断も、まったくまちがっている。おまえたちは「自由、平等、博愛」というボロボロの旗をつかつて、党と社会主義にたいするおまえたちの攻撃をおおいかくそうとしても、そんなことができるものではない。おまえたちは「自由、平等、博愛」というボロボロの旗を盾にして、おまえたちの退却を掩護しようとしても、そんなことができるものではない。おまえたちはわれわれにプロレタリアート独裁を放棄させ、おまえたち妖怪変化と自由、平等、博愛を語らせ、われわれにたいするおまえたちの独裁をゆるませようとしているが、そんなことはなほおさらできるものではない。おまえたちの手合いは、うわべは人間でも、腹の底は悪魔である。おまえたち狼は、羊の皮をかぶれば人をまどわすことができる、などと考へてはならない。毛沢東思想で武装した広はんな労働者・農民・兵士大衆、

革命的幹部、革命的知識人は、立場がしっかりしており、旗じるしがはっきりしており、目もくもっていない。われわれはすでにおまえたたちの反革命の黒い幕を引きずりおろして、おまえたたちの魔手をつかまえた。われわれはかならず、おまえたたちの化けの皮をつぎつぎとはぎとり、そのみにくい姿を白日のもとにすっかりあばきだすであらう。

ブルジョアシーの「権威者」であるだんながたよ。おまえたたちは、口をひらけば「自由」を要求し、いわゆる「放」を強調しているが、実際には、天と地をすりかえるような手口をつかかって、党の放の方針を根本からねじまげ、放の階級的内容をすっかりまっ殺している。おまえたたちの「放」は、おまえた自身自身の階級の要求にこたえてブルジョアの自由化を実現しようとするものであり、党の指導に反対し、プロレタリアート独裁に反対し、毛沢東思想に反対するものである。

「党の方針は『放』ではないのか」——これが、ブルジョアシーの「権威者」であるだんながたのかかげた看板である。そのとおりだ。われわれは確固としてゆるぐことなく放の方針をとっている。毛主席は、「われわれは放の方針をとる。なぜなら、それはわが国の強化と文化の発展に役だつ方針だからである」とのべており、また、「放とは、人びとが大胆に話をするのででき、大胆に批判をすることができ、大胆に論争をすることができ、大胆に、思いきってみんなに意見を出させることである」とも述べている。毛主席はこの問題にふれたさい、「われわれはなお長期にわたってブルジョアシーや小ブルジョアシーの思想とたたかわなければならぬ。こうした状況を理解しないで思想闘争を放棄するのは、誤りである。あらゆる誤った思想、あらゆる毒草、あらゆる妖怪変化のたぐいにたいしては、すべて批判をくわえなければならず、けつしてこれを自由にはん蓋させて

はならない」と、とくに指摘している。われわれの放は、プロレタリアートの断固とした階級政策であつて、これにはプロレタリアートの政治的基準がある。ところが、おまえたたちのいわゆる「放」とは、ブルジョアシーが意見を出すのは許すが、プロレタリアートが意見を出すのは許さず、おまえたたちブルジョアシーの「権威者」「専門家」「学者」が毒をまきちらすのは許すが、広はんな労働者・農民・兵士大衆、革命的幹部、革命的知識人が反撃するのは許さない。ひと口にいえば、おまえたたちは「放」ということに名を借りて、党と社会主義に反対しているのである。

35

事實はそのとおりではなかつただろうか。長年のあいだ、おまえたたちブルジョアシーの「権威者」であるだんながたは、思うさま妖怪変化をオリから飛びださせて、国際的に帝国主義、現代修正主義、各国反動派の反中国大合唱と呼応し、一貫してほしいままに毒をまきちらし、一日としてやめたことはなかつた。おまえたたちの毒草は、われわれの新聞、ラジオ、定期刊行物、書籍、教科書、講演、文芸作品、映画、演劇、芸能、美術、音楽、舞踊などをうずめつくしたが、おまえたたちは、これまで一度もプロレタリアートの指導をうけようと提唱したことがなく、また、だれの許可をもうけようとしなかつた。ところが、われわれが思想・文化戦線で反撃戦に出ると、おまえたたちは労働者・農民・兵士大衆にたいし、またプロレタリア左派にたいして、どのような態度をとつただろうか。おまえたたちは、毒草を批判したものをみなにぎりつぶし、あるものは数年間もおさえてしまった。おまえたたちは、これも御法度、あれも禁制と、いかにももつたいぶつて、意味ありげな理屈をならべたてて、労働者、農民、兵士をおどしあげようとした。おまえたたちは、ブルジョアシーの学術的「権威者」なるものをもちあげて、プロレタリアートを代表する戦闘的な新生の力を敵視し、抑圧するとともに、労働者、農民、兵士がプ

ルジョアジの「権威者」を打ち倒すことをゆるさず、労働者、農民、兵士が革命をおこなうことをゆるさなかつた。

ここからもわかるように、おまえたちが必要とした「自由」は、ほかでもなく、へ三家村の殺人宿をひらく自由であり、悪質な『燕山夜話』をまきちらす自由であり、シエオカレン謝瑤環、リーオニエン李慧娘、ハイケイ海瑞の免官、ヘン兵は城下に迫るなどの悪質な劇や悪質な映画をさかんに舞台やスクリーンに登場させる自由であり、右翼日和見主義分子の冤罪を訴え、かれらの巻土重求をばげます自由であり、広はんな労働者・農民・兵士大衆が毛主席の著作を實際と結びつけて学び、運用することに水をさし、これを打ちのめす自由であり、腐敗没落した地主階級やブルジョアジの思想、修正主義の思想をさかんに宣伝して、資本主義復活のために鳴り物入りで道をひらく自由であった。おまえたちが必要とした「自由」は、党と社会主義を攻撃する自由であり、プロレタリアート独裁を攻撃する自由であり、毛沢東思想を攻撃する自由であつた。ひと口にえば、それは反革命の自由にはかならない。

毛主席がのべているように、（）世界には、具体的な自由と具体的な民主主義があるだけで、抽象的な自由や抽象的な民主主義はない。階級闘争の社会では、搾取階級に勤労人民を搾取する自由があれば、勤労人民には搾取されない自由はない。ブルジョアジに民主主義があれば、プロレタリアートと勤労人民には民主主義はないのである。われわれの社会主義制度は、人民の内部にだけ言論の自由をゆるし、すべての反革命分子にはこうした自由をゆるさない。おまえたちは党の指導に反対し、社会主義に反対しているが、われわれはけつしておまえたちにこうした自由をあたえない。もしおまえたちに反党の自由、反社会主義の自由をゆるせば、革命は失敗し、人民は災厄にあい、国家は滅びてしまう。

ブルジョアジの「権威者」であるだんながたよ。おまえたちは口をひらけば「平等」となえ、「真理のまゝではだれも平等だ」などといっている。これこそ真正銘のブルジョアジのスローガンであり、ブルジョアジを守って、プロレタリアートに反対し、マルクス・レーニン主義に反対し、毛沢東思想に反対するきわめて反動的なスローガンである。

おまえたちは、ほんとうに平等を実行しているのだろうか。そうではない、まったくそうではない。おまえたちはプロレタリアートに攻撃をかけたとき、いかに凶暴であり、横暴であつたことであろう。おまえたちは、ブルジョアジの「専門家」「学者」の作品なら、まるで神のようにあがめ、宝のように大切にし、大いに掲載し、大いに宣伝し、大いに上演し、大いに賞賛した。ところが、労働者、農民、兵士の作品となると、毛主席の著作を實際と結びつけて学び、運用したりつばな論文でさえ、一文の値打ちもないものとみなして、おおつばらに「俗流化」「単純化」「実用主義」の典型と中傷し、一撃のもとにゴミ箱へたたきこんでしまった。これが平等といえるだろうか。おまえたちは、あれほど多くの毒をまきちらしておきながら、ひとたびわれわれが反撃に出ると、こんどはたちまち「真理のまゝではだれも平等だ」などとわめきたてた。おまえたちはあろうことか、プロレタリア左派に「学閥」のレッテルをはりつけ、われわれの反撃を「横暴」だとか、「権勢をカサにきて人をおさえつける」とかと中傷した。われわれはたずねたい。いったい、「学閥」とはどんなものなのか。「学閥」とはだれのことなのか。プロレタリアートは独裁を必要とせず、ブルジョアジを圧倒する必要がない、とでもいうのだろうか。プロレタリアートの学術はブルジョアジの学術を圧倒し消滅する必要がない、とでもいうのだろうか。おまえたちがこのようにするのは、実際には、孤塁をまもってあくまでも手むかい、批判をこぼ

み、プロレタリア左派に打撃をあたえ、真のブルジョアの学閥を支持しようとするためである。これを平等といえるだろうか。

おまえたちはほんとうに真理を重んじているのだろうか。そうではない。おまえたちは、「真理」の看板をかけて、陰謀をすすめているのである。おまえたちは、核心をえぐりとする戦術をつかつて、真理の階級性を根底からとりのぞいてしまった。おまえたちは、はたして、階級社会には、階級的な真理があるだけで、抽象的な超階級的な真理などは絶対にならないということを知らないのだろうか。ウリのつるにナスビはならない。ちがった階級は、ちがった言葉を口にするものである。ゆらい、真理と曲論にたいし、香りのよい花と毒草にたいし、ちがった階級はちがった見方をするものである。おまえたちがもちあげている「香りのよい花」は、われわれが根こぎにする毒草にはかならない。おまえたちがみついている「真理」は、われわれが反対するブルジョア級の曲論にはかならない。(真理は客観的なものである。真理はただ一つであって、いつたいたれが真理を踏見するかは、主観的な誇示ではなく客観的な実践によつてきまるのである。真理をはかる尺度は、いく億人民の革命的実践以外にない。社会発展の客観的法則を認識し、真理をつかむことができるのは、もつとも先進的で、もつとも革命的なプロレタリアート以外にない。)毛沢東思想は、現代のマルクス・レーニン主義の最高峰であり、もつとも高度な、もつとも生きたマルクス・レーニン主義であり、プロレタリアートと世界の革命的人民の強大な思想的武器であり、われわれのこの偉大な時代の偉大な真理である。毛沢東思想は、社会主義の発展法則にかなった真理であり、自然界の発展法則にかなった真理であり、プロレタリアートの革命の必要にかなった真理である。われわれが毛沢東思想を最高の指示、最高の指導とみなしているのは、真理を愛し、真理を擁護し、真理を堅持

しているからである。おまえたちは「真理のまえではだれも平等だ」などとわめきたてているが、はつきりいって、それは、毛沢東思想に反対するものにほかならず、反動的なブルジョア思想と修正主義思想を偉大な毛沢東思想にとつてかわらせようとするものにほかならない。これこそ、おまえたちの大陰謀なのである。

毛主席がわれわれに教えているように、プロレタリアートとブルジョア級の闘争、マルクス・レーニン主義の真理とブルジョア級およびすべての搾取階級の曲論との闘争は、もし東風が西風を圧倒するのでなければ、西風が東風を圧倒するのであって、平等などというものは絶対にありえない。プロレタリアートがブルジョア級と闘争すること、プロレタリアートがブルジョア級にたいして独裁をおこなうこと、プロレタリアートがさまざまな文化領域をふくむ上部構造で独裁をおこなうこと、また、共産党内にもぐりこんで、赤旗をたてながら赤旗に反対しているブルジョア級の代表者にたいし、プロレタリアートがひきつづきこれを掃することなど、こうした基本問題について、平等などというものの存在をはたして許すことができるだろうか。数十年のふるい社会民主主義政党と数十年の現代修正主義は、これまで一度もプロレタリアートにブルジョア級との平等をゆるしたことがなかった。かれらは、数千年の人類の歴史が階級闘争の歴史であったことをあたまから否定し、プロレタリアートのブルジョア級にたいする階級闘争をあたまから否定し、プロレタリアートのブルジョア級にたいする革命とブルジョア級にたいする独裁をあたまから否定している。逆に、かれらは、ブルジョア級と帝国主義の忠実な手先であり、ブルジョア級や帝国主義といっしょになって、プロレタリアートを抑圧、搾取するブルジョア級の思想体系と資本主義の社会制度を固執し、マルクス・レーニン主義の思想体系と社会主義の社会制度に反対している。かれらは反共・反人民の一群の反革命分子である。かれらのわれ

われにたいする闘争は食うか食われるかの闘争であり、そこには平等などというものはまったくありえない。したがって、われわれのかれらにたいする闘争も、食うか食われるかの闘争でしかありえず、われわれのかれらにたいする関係は、絶対に平等の関係などというのではなく、一つの階級がもう一つの階級を抑圧する関係、つまり、プロレタリアートがブルジョアにたいして独裁あるいは専政をおこなう関係であり、なにかこれとはちがった関係、たとえば、いわゆる平等の関係、被搾階級と搾階級との平和共存の関係、仁義道德の関係などというものはありえない。

ブルジョアジーの「権威者」であるだんながたよ。おまえたち妖怪変化のたぐいが大衆の前で虚勢をはっておし立ててあるいた黒い旗には、また「博愛」という文字がしるしてある。おまえたちはどのような「愛」を「ゆきわたらせている」のであろうか。おまえたちは、ブルジョアジーへの愛にみちあふれ、プロレタリアートへの憎しみにみちあふれている。これこそ、おまえたちブルジョアジーの博愛観にほかならない。

「博愛」精神にみちあふれたこれらの慈善家どもは、いったい、どんなものを「愛している」のか、それを見てもみようではないか。反党・反社会主義の悪党一味が党に気違いじみた攻撃をくわえ、党の指導をくつがえし、わが党に強烈な「真っ向からの一撃」をくわえ、「頭から犬の血をあびせかけ」ようとしたとき、おまえたち舞台裏の頭目どもはさかんに青信号を出して、戦鼓を打ちならし、風雲を呼びおこし、波を荒ら立たせ、有頂天になって、拍手かっさいをおくり、自分たちの天下はまもなくやってくると思ひこんだ。だが、あまい夢は長くはつづかず、おまえたちの反党・反社会主義の黒幕はたちまちあばきだされた。おまえたちは、ヨロイ、カブトをぬぎすてて、あわてて逃げのびようとしたとき、太いそきで「博愛」のボロ旗をかかげ、いかにも偏見のない、公

正な偽善的な顔つきをして、「學術観点的反動的な人」にたいしてもかれらが「意見を保留する」のを許すべきであるとか、「革命を許さない」のではないとか、「引きずり出して放さない」のはよくないとかとわめきたてた。類は友をよぶとは、このことである。おまえたちは、自分のこの反党・反社会主義の悪党一味にたいして、なんといたれりつくせりのかばいようであらう。ところが、確固としたプロレタリア左派にたいしては、これを目のうえのこぶとみなして、かれらの「作風」を「是正」し、かれらを「追放」し、かれらを一口に食いつくしてしまわずにはおかない剣幕である。おまえたちのブルジョア的立場はなんとしっかりしていることである。おまえたちの愛と憎しみはなんとはつきりしていることである。

毛主席がわれわれに教えているように、「世の中には、けつしていわれのない愛もなければ、いわれのない憎しみもない。」「反動派や反動階級の反動行為にたいしては、われわれはけつして仁政をほどこしはしない。われわれは人民の内部に仁政をしくだけで、人民の外部の反動派や反動階級の反動行為に仁政をほどこすものではない」。ブルジョアジーの「権威者」であるだんながたよ。おまえたちは帝国主義、現代修正主義、各国反動派とひとつ穴のムジナであり、国内の地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子とひとつ穴のムジナである。われわれとおまえたちとは両立しないものであり、われわれとおまえたちとの闘争は妥協のありえないものである。おまえたちはこれまで一度もわれわれを「愛」したことがないし、われわれも永遠におまえたちを愛しないであらう。おまえたちは、われわれプロレタリアートの偉大な党と人民大衆を歯ぎしりするほど憎み、骨の髄までうらんでいるので、ありとあらゆる卑劣な手口をつかい、せがひでも死地に追いこまねば気がすまないのである。これでもなお、われわれはおまえたちへの「愛」などを口にする事ができるだらうか。われわれ

は、革命の敵にたいしては絶対に温情主義をとらない。おまえたちにたいする温情は、プロレタリアートにたいする残忍にはかならず、無数の勤労人民にたいする残忍にはかならない。われわれはけつして狼を羊ととりちがえてはならず、砒素を砂糖ととりちがえてはならない。われわれはけつしておまえたちのような微笑をうかべた虎の手にはのらないであろう。われわれはかならず礼には礼をもつてこたえなければならぬ。われわれはかならずおまえたちに壊滅的な打撃をあたえ、おまえたちを徹底的に鼻もちならないものにし、おまえたちを徹底的にたたきつぶし、おまえたちを徹底的に打ち倒し、すべての「害虫」をのこらず一掃しなければならぬ。

「自由、平等、博愛」は、ブルジョアジーの反動的な腐敗した世界観である。十八世紀にフランスのブルジョアジーがこのスローガンをうち出してから、こんにちまで、すでに二世紀を経ている。フランスのブルジョアジーが革命を指導していた当時は、このスローガンにも反封建の進歩的意義があつたが、それはブルジョアジーが自分の階級の私的利益を守るいつわりのスローガンであつた。ブルジョアジーが民主主義革命をおこなつたとき、かれらはこのスローガンで勤労人民をだまし、それによつて封建地主階級から権力をうばいとり、ブルジョアジーの独裁をうち立てた。ブルジョアジーは権力を手にいれると、ひきつづきこのスローガンで勤労人民をマヒさせ、それによつてかれらの血なまぐさい支配をおおいかくし、ブルジョアジーの独裁をうちかためた。ブルジョアジーの口にするいわゆる自由とは、雇用労働を搾取する自由、植民地を収奪する自由にはかならず、他方では、勤労者は搾取される自由しかなく、植民地人民は収奪される自由しかないのである。ブルジョアジーの口にするいわゆる平等とは、雇用労働を搾取する平等にはかならず、勤労人民にとつては搾取されるという点でしか平等がないのである。ブルジョアジーの口にするいわゆる博愛とは、さらに多くの人がかれらの搾取と奴隷化

をうけることであり、搾取と抑圧をうける人民にたいしブルジョアジーの搾取に感謝感激するよう要求することである。マルクスとエンゲルスがのべているように、労働力の搾取者は、一塊の肉、一本の血管、一滴の血でも搾取できるかぎり、けつして手をゆるめないであろう。これこそ、ブルジョアジーの「自由、平等、博愛」のスローガンの反動的性質にはかならない。

ブルジョアジーの権力がプロレタリア革命によつてうち倒されたのちも、かれらはけつして自分の失敗にこりず、いつもあらゆる手をつくして、さまざまの陰謀と破壊活動をすすめるものであり、また革命の隊列にもぐりこんだかれらの代理人をつうじ、「自由、平等、博愛」という反動的なスローガンを利用して、勤労人民をあざむき、マヒさせ、プロレタリアート独裁に反対し、すでに失つたかれらの「樂園」をとりもどそうと夢みるものである。ふるい社会民主主義者は、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁に反対するため、「自由、平等、博愛」の黒い旗をおしたたことがあつた。フルシチョフ現代修正主義者も、社会主義の資本主義への後退を実現するため、また世界人民の革命に反対し、これを破壊するため、やはりこの反動的な黒い旗をおしたた、これを悪名たかいソ連共産党綱領に書き入れた。一九五六年、ハンガリーのペトフィ・クラブもこの黒旗をつかつて、大衆をおおりにたて、反革命の反乱をおこなつた。わが国では、一九五七年、ブルジョア右派分子がこの黒い旗をおしたた、狂気のように党と社会主義に反対した。廬山会議で罷免された右翼日和見主義分子も、さかんにこの反動的なスローガンを宣伝して、党中央に対抗し、党の正しい路線に反対し、毛沢東思想に反対した。いま、おまえたちブルジョアジーの「権威者」であるだんながたも、歴史のゴミ箱からこのくずを拾いあげ、表面をつくるい、偽装をこらし、これをおまえたちの反党・反社会主義の大將旗とし、毛沢東思想に対抗するおまえたちの行

動綱領とし、社会主義文化大革命を妨害し、破壊するおまえたちの宝器としている。おまえたちは古今内外のブルジョアと修正主義の衣鉢をつぎ、ぐるになって私的な利益を追い求め、ことばたくみに詐欺をはたき、プロレタリアートと対決して、プロレタリアート独裁をくつがえし資本主義の復活を實現しようとする。だが、おまえたちのこうしたたくらみは、むだ骨折りであり、白昼夢である。おまえたちの運命は、けつしておまえたちの先祖や兄弟よりよくはないであらう。

われわれの社会主義社会は、いまなお階級対立の基礎のうえにうちたてられている。地主階級、ブルジョアはうち倒されたが、完全に消滅されたわけではない。われわれは搾取階級の財産を没収したが、かれらの反動思想を没収することはできない。かれらはまだ生きながらえており、その野望はまだ死にたえてはいない。かれらはなんとかして復活しようとしている。かれらが人口総数に占める割合はひじょうに小さいが、かれらの抵抗力はその人口比率よりもはるかに大きい。都市と農村における小ブルジョアジーの自然発生的な力は、たえず新しいブルジョア分子を生み出す。労働者の隊列にも、成長し、拡大していくうちに、一部の複雑な要素がまぎれこんでくる。党と政府の機構でも、一部のものは墮落変質する可能性がある。そのうえ、帝国主義、現代修正主義、各国反動派は、いつもあらゆる手をつくしてわれわれを片付けようとする。すべてこうしたことは、わが国を資本主義復活の危険にさらすものである。われわれは決してこうした危険を無視してはならない。われわれは、国外の敵にたいしていく層倍も警戒心を高めなければならないが、国内の敵にたいしても油断してはならない。われわれは銃をもつ敵を重視しなければならないが、銃をもたない敵をも見くびってはならない。羊の皮をかぶった狼は、普通の狼よりも凶暴であり、大群の狼よりもさらに凶暴である。赤旗をかかげた敵は、白旗をか

かげた敵よりいっそう危険である。糖衣砲弾は人を殺す。微笑をうかべた虎は、人を食い殺す。われわれは、どのように複雑な目まぐるしい状況のもとでも、業務に気をとられて政治を忘れるようなことは絶対にあってはならない。政治を忘れ、階級闘争を忘れることは、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の根本的観点を忘れることである。それは、うかつものであり、まぬけである。われわれは、かならず党中央の指示にしたがつて、片時も階級闘争を忘れず、片時もプロレタリアート独裁を忘れず、片時も政治先行を忘れず、また毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげることを片時も忘れないようにしなければならない。

マルクス主義の本質は、批判的、革命的なことである。その基本点は、批判をし、闘争をすすめる、革命をおこなうことである。ブルジョアジーのもの、修正主義のものにたいしては、徹底的な革命の方法をとりうるのみであつて、けつして改良主義の方法をとってはならない。革命の敵にたいしては、勧告にたよつてはならず、闘争にたよらなければならない。たたかかなければ、たたかかれば、たたかかれば、たたかかれば、たたかかれば、うち破らなければならない。うち破るとは、批判することであり、革命をおこなうことである。まずもつてうち破れば、その過程でうち立てられる。ブルジョアジーの「権威者」であるだんがたよ、おまえたちはわれわれのことを「爆破手」だとか、「こん棒」だとかいっている。そのとおりだ。われわれプロレタリアートの「爆破手」となつて、反党・反社会主義のすべての殺人村、殺人宿をこつばみじんに爆破するのである。われわれはプロレタリアートの「黄金棒」となつて、すべての妖怪変化のたぐいを徹底的に打ちのめすのである。党と社会主義に反対しようとするもの、プロレタリアート独裁に反対しようとするもの、毛沢東思想に反対しようとするもの——そういうものにたいしては、われわれはすべてこれを打ち倒すであらう。それがどのよ

うな「権威者」であり、どのような高い地位にあるとしても、全国をあげてこれを討ち、全党をあげてこれを誅すであらう。

いま、われわれはすばらしい情勢のなかにある。世界の情勢もすばらしいし、中国の情勢もすばらしい。わが党は、毛主席の指導のもとで数十年も革命をおこなってきた党であり、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想で武装した党であり、大衆と密接なつながりをもつ党であり、ゆたかな革命の経験と光榮ある革命の伝統をもつ党であり、長期にわたる革命闘争のなかでさまざまな試練の荒波にたえぬいてきた党であり、光榮ある、偉大な、正しい党である。いかなる妖怪変化のたぐいも、いかなる陰謀家、野心家も、もし、内部からわれわれのとりでを奪いとり、党と軍隊と政府をのつたフルシチョフの茶番劇を中国でくりかえそうとするなら、かならずさげすんだ目にあい、名はもちろん生命まで失い、徹底的な失敗に終わることであらう。われわれは、偉大な毛沢東思想と偉大な共産主義の正義の事業によって、わが国の勤労人民の革命的熱情をもえあがらせ、その目を未来にむけさせ、確固としてゆるぐことなく前進させなければならない。われわれ全国の労働者・農民・兵士大衆、革命的幹部、革命的知識人は、党中央と毛主席のまわりにかくく結集し、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、ブルジョアジーの悪党一味の気ちがいじみた攻撃を徹底的に粉碎し、ブルジョアジーの「自由、平等、博愛」の黒い旗を断固ぬきとり、すべての妖怪変化のたぐいを一掃し、偉大な社会主義文化大革命を最後までやりぬかなければならない。

毛沢東思想の新たな勝利

『人民日報』社説

(一九六六年六月四日)

本紙はきょう二つの重要なニュースを発表した。その一つは、中国共産党中央委員会が北京市委員会を改組し、新市委員会第一書記を李雪峰(リシュエフ)中国共産党中央委員会華北局第一書記の兼任とし、第二書記に呉徳同志(ウーデ)を任命すると決定したことである。いま一つは、改組後の新北京市委員会が陸平(リウピン)、彭珮雲(ペンペイユン)のすべての職務を解き、北京大学党委員会の改組をおこない、また、(工作班を派遣して、同校の社会主義文化大革命を指導させるとともに、)党委員会の職権を代行させると決定したことである。

この二つのニュースは昨日の午後四時に放送されると、たちまち北京市の広はんな労働者・農民大衆および各機関、大学・専門学校、大衆団体、北京市駐とん部隊から熱烈な擁護をうけた。広はんな大衆は喜びにわきたち、一致して、中国共産党中央委員会の決定と改組後の新北京市委員会の決定がひじょうに英明なものであり、ひじょうに正しいものであることを認めた。これは毛沢東思想の新たな勝利である。

前北京市委員会への指導には、反党・反社会主義の黒い糸がつけられた。

前北京市委員会の一部の主な責任者は、マルクス主義者ではなく、修正主義者であった。

社会主義文化大革命のなかで、反党・反社会主義の反革命集団へ三家村[▽]があげき出された。この反革命集団の根は、前北京市委員会にはかならなかつた。

『前線』『北京日報』『北京晩報』は、かなり長い間、修正主義の毒素をまきちらし、資本主義の復活をくだてる反革命集団の道具となっていた。これらの根は、前北京市委員会にはかならなかつた。

北京市の党・政府機関の多くの部門は、かなり長い間、党中央のマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の路線を實行するのではなく、修正主義の路線を實行したのであり、プロレタリアートのブルジョアジーにたいする独裁の道具ではなく、ブルジョアジーのプロレタリアートにたいする独裁の道具であった。これらの根は、前北京市委員会にはかならなかつた。

前北京市委員会は、教育の分野でも、反党・反社会主義の路線をおしすすめた。北京大学こそ、かれらの支配下にあるもつともがん強なとりであつた。まさに北京大学の広はんな学生が摘発しているように、かれらの教育方針は、プロレタリア革命事業の後継者を養成するものではなく、ブルジョアジーの後継者を養成するものであつた。

北京市の広はんな労働者・農民・兵士大衆、広はんな革命的幹部、広はんな革命的知識人は、長期にわたつて、前北京市委員会の反党・反社会主義の黒い糸を排斥し、これとたたかつてきた。かれらは断固として、党中央、毛主席の指示にしたがい、ひじょうに多くの仕事をし、社会主義革命と社会主義建設の事業に貢献してきた。北京市地区の九五パーセント以上の人民と九五パーセント以上の幹部はみな、毛主席を擁護し、党中央を擁

護している。一時ごまかされた人も、いったん事の真相を知ると、ただちに立ち上がつて、前北京市委員会の反党・反社会主義の黒い糸に反対する闘争に身を投じている。

いま、北京大学には、すさまじい勢いの革命情勢があらわれている。蕭元梓^{ニョウゲンシ}ら七同志の大字報は、力強く第一発目の砲弾を放つた。この大字報がラジオで放送され、新聞紙上に発表されると、全校の人びとは、激しく心を動かし、よろこびにわきたつた。プロレタリアートの革命派は、意気大いになり、左派の隊列は急速に拡大した。おびただし大字報が、まるで放列をしいた大砲のように、反党・反社会主義分子の頭上に攻撃を浴びせた。首都の各大学・専門学校の積極的な支持は、プロレタリアートの革命的氣勢を大いに強めた。「王党派」は肝をつぶし、すでに完全に孤立した地位におちこんでいる。北京大学の広はんな学生、労働者・職員、教師は、新市委員会の派遣した工作班の指導のもとに、陸平らの反党・反社会主義の犯罪行為にたいして断固とした清算と闘争をおしすすめている。

これら反党・反社会主義の反革命集団は、きわめて強力なように見えた。かれらの支配と封鎖のもとでは、水さえそそぎこむことができず、針さえさしこむことができなかつた。だが、毛主席と党中央がプロレタリア文化大革命の偉大な呼びかけをおこない、大衆が立ち上がると、かれらの反革命の正体はまたたく間にあばき出された。かれらはすべての反動派と同じように、ハリコ^{ハリコ}の虎にすぎなかつたのである。

わが国はひじょうにすばらしい情勢にある。全国人民は毛主席と党中央をかきりなく熱愛し、毛沢東思想は人びとの心を深くとらえており、広はんな大衆の政治的自覚はこれまでになく高まり、社会主義革命と社会主義建設の事業はきわめて大きな成果をおさめている。毛主席に反対し、毛沢東思想に反対し、党中央に反対し、プロ

レタリアート独裁に反対し、社会主義制度に反対する者は、それがどのような人間であろうと、その地位がどれだけ高く、経歴がどれだけ古かろうと、全党をあげてこれを誅し、全国をあげてこれを討たなければならない。かれらのたどる末路は、一身を滅ぼし、悪名を残すことだけである。

われわれは、改組後の新北京市委員会の指導のもとに、前北京市委員会の誤った路線とその影響がかならず完全に肅清されるものと確信している。北京市のプロレタリア文化大革命は、かならず偉大な勝利をかちとるにちがいない。北京市のあらゆる活動は、かならずりっぱにおこなわれるにちがいない。

プロレタリア革命派となるか ブルジョア王党派となるか

『人民日報』社説

(一九六六年六月五日)

毛主席と党中央の偉大な呼びかけのもとに北京^{ペキン}大学は、プロレタリア文化大革命のあらしをまきおこした。これまで抑圧されていた北京大学のプロレタリア革命派は立ちあがった。かれらは、陸平^{レイピン}をかしらとするブルジョア王党派の支配をくつがえした。資本主義復活の陰謀を粉碎する闘争はいま勝利のうちにくりひろげられており、ブルジョア王党派は広はんな大衆の包囲のなかに落ちこんでいる。

北京大学は、わが国の教育の分野で、長い歴史をもつ、もつとも重要な陣地である。修正主義路線をおしすめていた、反党・反社会主義の前北京市委員会の一部の主な責任者は、これまでずっと北京大学を、プロレタリアートと若い世代を争奪するための基地とみなしていた。

陸平ら一握りの王党派は、前北京市委員会の修正主義路線をがん固におしすめ、北京大学でブルジョアジ

「独裁をおこなってきた。陸平らの支配のもとで、一部の機構は、名義上はまだプロレタリアート独裁の旗じるしを残しながら、実際には、プロレタリアート独裁に反対する犯罪行為をおこなっていたのである。(かれらは、ブルジョアの、修正主義的な教育路線をおすすめ、極力、青年・学生を修正主義の道に引きいれ、青年・学生をブルジョアジーの後継者に育てあげようとした)。

陸平ら一握りの王党派は、ブルジョアジーの学界の権威なるものを途方もなくもちあげ、かれらに青年・学生の間にかんに毒素をふりまかせ、ブルジョア思想、修正主義思想を系統的に宣伝させた。かれらは、革命的な教師を排斥し、容赦のない打撃をくわえた。

陸平ら一握りの王党派は、かれらの修正主義の教育方針をうけ入れる一部の学生にたいして心をこめて養成し、いろいろと有利な条件や特別の配慮をあたえた。かれらは、一群の修正主義の苗を育てあげて、それらを全国各地にばらまこうとはかった。

陸平ら一握りの王党派は、労働者、農民の子弟や自分たちの修正主義の教育方針にさからう学生を、このうえなく敵視した。これらの王党派は、さまざまな方法を定め、学生募集から教学にいたるまで、また、学期試験から卒業後の仕事の割当にいたるまで、あらゆる手をつくして、これらのりっぱな学生を制限し、排斥し、困らせ、差別扱いし、かれらにたいして粗暴きわまる闘争までもおこなった。

陸平ら一握りの王党派は、社会主義教育運動に必死になって抵抗し、これを破壊した。北京大学の革命的な教師、学生は社会主義教育運動のなかで、陸平ら王党派の反党・反社会主義のおびただしい言行をあばきだし、かれらが修正主義教育方針をおすすめしていたことを示す大量の資料をあばきだしたが、それでもかれらはがん強

に抵抗した。かれらは、前北京市党委員会の直接の指揮のもとで、狂気のように反撃に出、まき返しと報復の反攻をかけてきた。かれらは、革命派にたいしてさまざまな罪名をデッチあげ、いろいろなレッテルをはりつけ、包囲攻撃を組織し、交替で攻撃をおこなった。かれらが積極分子にたいしてすすめたこのような残酷な闘争は、実に七ヵ月間もつづいた。これは一九六五年に起こったきわめて重大な反革命事件である。

陸平ら一握りの王党派は、やたらと、組織的な規律を破壊したとか、指導に反対したとかなどの名目で、自分たちの命令に従わない人たちに打撃をあたえた。かれらの党派性はたしかにひじょうに強いが、その党派性はブルジョア王党派の党派性であり、修正主義反革命の党派性である。かれらにはたしかに組織的な規律があり、指導がある。かれらの組織的な規律はブルジョア王党派の組織的な規律であり、かれらの指導は修正主義反革命の指導である。われわれはこれらのだんながたに告げなければならぬ。おまえたちの党派性と敵対するものはプロレタリアートの党派性にほかならない。おまえたちの組織的な規律を破壊することは、プロレタリア革命とプロレタリアートの組織的な規律を自覚的に守ることにほかならない。おまえたちの指導に反対することは、毛主席をはじめとする党中央の指導を自覚的に擁護し、守りぬくことにほかならない。これらの人たちはりっぱな同志であり、プロレタリア革命派であり、北京大学のプロレタリア革命の先ぼうである。毛主席をはじめとする党中央は、あくまでプロレタリア革命派を支持し、おまえたちの指導を倒し、おまえたちのような王党派を倒すのだ、と。

北京大学の闘争はプロレタリア革命派とブルジョア王党派との闘争であり、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想と修正主義との闘争であり、プロレタリア教育路線とブルジョア教育路線との闘争であり、革命と反革命と

の闘争であり、きわめて先鋭な階級闘争である。

（若い世代を争奪するブルジョアとプロレタリアートとの闘争は、社会主義社会における階級闘争の重要な一部である。教育の分野における二つの路線、二つの道の闘争は、結局のところ、若い世代をプロレタリアートの後継者に養成するか、それともブルジョアの後継者に養成するかの問題である。これはわが党とわが国の前途と将来の姿にかかわる、カギとなる大きな問題である。）

社会主義新中国の「平和的転化」にたいする帝国主義の幻想は、若い世代に寄せられている。かれらは、われわれの若い世代がマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の道をあゆまず、修正主義の道をあゆむことを夢想している。陸平らが前北京市党委員会の修正主義教育路線をがんとおしすすめていたのは、帝国主義の必要に迎合していたのにはかならない。

毛沢東思想は、わが国で、日ましに人びとの心のなかに深く根をおろしつつある。だれであろうと、これを封鎖し、毛沢東思想に大衆を近づかせないようにすることは、不可能である。陸平らが長年にわたつてとぐろをまいてきた、これほどがん固なとりでにおいてさえも、圧倒的多数の学生、労働者・職員、教師は毛主席を擁護し、毛沢東思想を擁護し、わが党を擁護し、わが党中央を擁護しているのである。北京大学では、ひじょうに多くの学生、労働者・職員、教師が一貫して毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、陸平らにたいして断固とした闘争をすすめてきた。

北京大学の闘争は、ブルジョアジーの復活とプロレタリアートの反復活の闘争の典型的な例である。すべての革命的な同志は、ここからきわめて貴重な教訓を汲みとらなければならない。

プロレタリア文化大革命の展開は、教育関係者に、青年・学生に、すべての文化関係者に、またすべての人びとに、つぎのような鋭い問題を提起している。プロレタリアートとブルジョアジー、社会主義と資本主義、この二つの階級、二つの道の生死をかけた闘争において、いったいどちらの側に立つのか、プロレタリア革命派となるのか、それともブルジョア王党派となるのか、と。誰をとわずみな、そのどちらかを選択しなければならぬ。

圧倒的多数の人、九五パーセント以上の人はかならずブルジョア王党派をすてきり、プロレタリア革命派の側に立ち、毛主席と党中央のまわりに堅く結集して、わが国の社会主義革命事業を、プロレタリア文化大革命を最後までやりぬくであろう、とわれわれは信じている。

中国の社会主義文化大革命 (第四集)

1966年 初版発行

定価 40 円

出版者 外文出版社

(北京阜成門外百万莊)

発行者 中国国際書店

(北京 P. O. Box 399)

編号: (日) 3050-1477

3-J-716P

00034

SECRET
CONFIDENTIAL
CONFIDENTIAL
(SECRET)

CONFIDENTIAL
CONFIDENTIAL